

玉田佳子 著

『擬装する女性作家——十八世紀
イギリス女性作家の戦略』



本書は、著者が2009年に関西大学に提出した博士論文である。タイトルと「まえがき」に明示されているように、主眼は、18世紀イギリスの女性作家が父権制社会の中で「擬装」という戦略を用いて、時代が押さえ込もうとしていた女の欲望や主張を作品に潜り込ませているさまを読み解くことにある。分析の対象は、今ではもう馴染みの名前となった感のある D. マンリー、E. ヘイウッド、F. バーニー、M. エッジワースから、今後しかるべき注目を浴びることが期待される M. デイヴィス、J. パーカー、P. オーバンまで、じつに多彩だ。著者によると、18世紀前半の女性作家の作品は、マンリーやヘイウッドが得意とした「煽情小説」と、デイヴィスらが確立した「教訓小説」という対極的なジャンルに分かれていたが、「両者の小説の底流には女性の欲望という同じマグマが流れて」(v) いて、それがさまざまな手法でうまく隠され、18世紀後半に

はその術がより巧妙になっていった、ということである。

研究史上注目すべきは、日本では近年までほとんどとりあげられることのなかった18世紀前半の女性作家に、全10章のうち8章を割いている点だろう。最初の4章では『改心したコケット』をはじめとするデイヴィスの散文物語が論じられていて、コケットから賢明で家庭的な女性へという18世紀ヒロイン像の変化説に関心のある読者なら、まずはここに手が伸びそうだ。小説への自伝的要素のとりこみに興味のある向きには、第5章バーカー『愛の迷路』論と第6章マンリー『リベラの冒険』論がお勧めである。同時代の男性作家との影響関と気になれば、第4章『札付きの放蕩者』論（『クラリッサ』との比較）、第7章オーバン『ルシンダの生涯と恋の冒険』論、第8章ヘイウッド『アンチ・パメラ』論（ともに『パメラ』との比較）あたりから読み始めるのがよいかもかもしれない。個人的には、オランダからスペイン、トルコへと移動しながら、男装して海賊と戦ったり、コンスタンチノーブルで奴隷市にかけられたりする、極めて18世紀的なルシンダの物語に触発された。たとえば、この物語の空間的な布置を、同時代の『ロビンソン・クルーソー』や『ロクサーナ』、メアリー・モンタギューのトルコ旅行記などと比べてみたら、何が見えてくるのだろうか。

18世紀イギリス女性作家の研究は、1980年代のJ. スペンサー、J. トッドらによる再評価を起点に、1990年代のR. バラスターとJ. リケッティを中心とした世紀前半の女性作家の活動に焦点を当てた画期的な研究を経て、日本では富山太佳夫「最初は女」（2000、『文化と精読——新しい文学入門』〔2003〕に収録）が、リケッティの研究には大英帝国の問題、サイド

的視点が抜け落ちていると指摘している。最近では、ブリティッシュ・ネイションの形成と小説というジャンルの確立の関連を視野に入れた鈴木美津子他著『女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦——デイヴィス、ヘイウッド、エッジワース、オーエンソンの場合』（2008）や、現在もっとも研究が手薄と言わざるをえない18世紀中葉の女性作家論を含む十八世紀女性作家研究会編『長い十八世紀の女性作家たち——アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで』（2009）が相次いで刊行され、この分野の意欲的な研究は活発に継続中のようで、うれしい。

なかでも本書との関係で興味深いのは、河崎良二著『語りから見たイギリス小説の始まり——霊的自伝、道徳書、ロマンスそして小説へ』（2009）かもしれない。緻密なテキスト分析により（霊的）自伝から小説へと語りのモードが移行する瞬間を丁寧にたどったこの著作は、女性作家の作品も射程に入れていて、バーカーとヘイウッドを詳細に論じている。特にバーカーのジャコバイトとしての側面に光を当てた箇所など、ジェンダーの視点にあくまでもこだわった玉田氏の論考とあわせて読むと、さらなる研究の可能性が見えてくる思いがする。（英宝社、2009年5月、四六判 xii+304頁、2,400円）

——志渡岡 理恵（聖マリアンナ医科大学研究員）